

## 幼小をつなぐ学びと育ちの連続性の共有

—小規模校園における協働的な学びと一人一人の表現に着目して—

○丁子かおる（和歌山大学教育学部）奥村 孝（和歌山市立雑賀崎小学校・幼稚園 校長）  
戎 浩晃（和歌山市立雑賀崎小学校 教頭）中井麻由（和歌山市立雑賀崎幼稚園 教頭）  
太田由美子（和歌山市立雑賀崎幼稚園）角 忍（和歌山市立雑賀崎幼稚園）山田美月（和歌山  
市立雑賀崎幼稚園）池谷義輝（和歌山市立雑賀崎小学校）北野美和（和歌山市立雑賀崎小学  
校）白井千聡（和歌山市立雑賀崎小学校）出口 静（和歌山市立雑賀崎小学校）村木美奈（和  
歌山市立雑賀崎小学校）森本孝子（和歌山市立雑賀崎小学校）横井志穂（和歌山市立雑賀崎小  
学校）

### 1. 研究の背景と目的

#### 1. 研究の背景

近年、多数の経済学分野での長期的追跡研究（ペリー就学前プロジェクト<sup>1</sup>など）の結果から、質の高い幼児教育が、子どもとその将来の学力、犯罪率、収入、健康、人生に良い影響をもたらすとされている。そのため、幼児教育への早期の投資が効率的に税金を納める良い市民を育成するとして、世界的潮流として幼児教育・保育の義務化や無償化が政策レベルで進められている。これを受け国内でも令和元年より幼児教育の無償化が実施されている。

また、こうした質の高い幼児教育は、特に、貧困家庭など支援を必要とする家庭の子どもへの影響が高いとされ、家庭での教育を補い、子育て支援を通してそうした保護者を支援すると考えられている。加えて、特別支援の子どもに対しても影響が示されており、いかなるハンディキャップを持つ子供であっても、その子らしくあり、自己を発揮できる環境としての早期の教育と保護者支援があることで、より安定した学校生活やその後の社会生活を送ることにつながっていくことを示唆していると考えられる。

ただし、重要となるのは、単に待機児童を解消するといった幼児教育の量的確保や家庭への保育サービスの提供ではなく、「質」の高い幼児教育である。その要素の一つが、幼小接続である。幼児期の学びと育ちを生かして小学校教育にスムーズにつなぐことは、その後の子供の学習にも影響する。そこで、文部科学省では、2022年3月に「幼保小の架け橋プログラム」の実施等を示し、手引き等が取りまとめて公表している<sup>2</sup>。ここでは、幼児教育・保育の無償化の実施とそれに伴う質向上の必要性や特別な配慮を要する子供への対応、持続可能な社会の創り手の育成の重要性などを背景とし<sup>3</sup>、幼小接続における現在の課題を挙げている。

このうち本研究では、課題3つに関わって研究を進めてきた。1つ目は、「『(1) 社会に開かれたカリキュラム』の実現に向けた質に関する認識の共有」で、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（以下、「10の姿」）を手掛かりに、社会に開かれることを目指し、幼小教員間で認識を共有することである。2つ目の「『(2) 幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』と各園・学校や地域の創意工夫を生かした幼保小の架け橋プログラムの実施」について、

10の姿の活用や、5歳児から小学校1年生の2年間（架け橋期）に着目し、プログラムの作成と実施、カリキュラム開発などが期待されており、本研究では、プログラムの作成は行っていないが、発達段階や過程を見通して、幼小教員で共に「10の姿」を参考に意見を述べ、各自がみとった子供の姿に当てはまる10の姿の検討と理解の共有を進めてきた。3つ目は、「(5) 地域における園・小学校の役割と関係機関との連携・協働等」で、スムーズに育ちと学びをつなぐ幼稚園3歳児から小学校6年生までを見通し、幼小連携及び協働について検討を行ってきた。

小規模校園である雑賀崎小学校・幼稚園では、小規模校園の特色を生かして日常から児童と幼児が行き来し連携する取り組みがされてきたが、感染症拡大で近年はこれらも行いにくくなっている。そこで、互いの教育を学び合い、子供を理解する機会として本共同研究を位置づけ幼小合同研修と研究を行ってきた。また、成果を確認すべく幼小教員にアンケートをとることで、教員の意識の変容、成果について調査を行うことにした。

## 2. 研究の目的と方法

本研究では、雑賀崎小学校・幼稚園において、2020年度からの3年間、幼児期から児童期にかけての育ちと学びを理解しあい、共有することで、教員間で小学校と幼稚園教育についてその特性や指導と援助・支援の方法の違いなどについて共通理解を行い、視野を

広めることで、自らの保育や授業の改善に役立てること、そして、子どもを幼小で連携して子どもの学びと育ちを支えることを意図して、幼小の教員が合同研修を行ってきた。3年目となる今年は、新型コロナウイルス流行の影響で、当初の計画されていた複数の研修が急遽、取りやめとなったが、それでも2回を対面で実施することができた。なお、研修には和歌山大学の学生7名も参加している。

次に、第1回で4・5歳児ビデオ・フォトカンファレンス、第2回で3歳児園内研究保育と協議会の内容を、その後、幼小合同研修による成果と向上についてアンケート調査の成果を報告する。

図1 研究会実施状況

	日時	内容	場所
第1回	R4年7月7日 (木) 15:30-16:45	4・5歳児ビデオ・フォトカンファレンス	雑賀崎幼稚園 遊戯室
第2回	R4年10月12日 (水)13:00-15:00	3・4・5歳児園内研究保育と協議会	雑賀崎幼稚園 遊戯室

## II. 幼稚園と小学校各教員による合同研修会内容

### 1. 4・5歳児ビデオ・フォトカンファレンス

雑賀崎幼稚園のR4年度の研究主題は「身近な環境にかかわり、生き生きと遊ぶ子供を育てる」であり、この日は4・5歳児複式クラスの保育についてビデオ映像を基に教員間で協議を行った。最初に担任よりそれまでの子どもの姿について説明があった。年中児は年少児の時は単式のクラスであったが、年中児になって年長児を含む複式クラスとなったことで、春には年長児と一緒に過ごすことで戸惑いを見せていたが、年長児が戸惑う年中児を遊び

に誘ったり遊びを教えたりしていく中で、次第に落ち着いて遊ぶようになり6月には自分から友達を誘って遊ぶ姿もみられるようになった。年長児も6月には年長児同士で誘い合って遊ぶようになっていった。

ここでは、幼児の虫取り場面と捕獲したモンシロチョウを年長児が図鑑で調べる場面などの動画を、幼小教員と大学教員である筆者、参加した大学生で視聴した。その後、協議については、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(以下;10の姿)を基に当てはまる項目を考えて、映像でみた場面について意見や質問を行うようにして協議を行った。(資料は、幼稚園教育課程4・5歳Ⅱ期と10の姿について配布)以下に内容を示す。

※小学校教員の発言は(小)、幼稚園教員の発言は(幼)とする。

#### ○知識・技能の基礎、思考力判断力の基礎について

・意見を言い合い協働する姿は「**言葉による伝え合い**」と「**協働性**」があり、幼児期なりの学び合いをしていた。(小)

・自分の思いを言葉で一生懸命に伝え合う姿があった。(「**言葉による伝え合い**」)

・蝶の模様を観察して模様から雄と雌と思考が発展する姿があり、小学校では3年生で理科で学ぶ内容への気づきがあった。同じ本を複数、用意してみてもよいかもしれない。「**自然との関わり・生命尊重**」の学び。(小)

・映像の年長児はカタカナも読むことができていた。(小)

・幼児では1歳の年(発達)の差は大きいと感じた。幼児がとても長い時間をかけて一つのことを調べる姿に驚いた。(はじめて自分でとれた蝶だったと幼稚園担任から説明)(小)・1年生ではダンゴムシを生活科で扱うのでつながっている。自分で捕まえた虫だったから自分のこととして夢中になって遊んでいた。生活科の素地ができていた。(小)

・幼児でも字をかく子供がいたが、文字の練習をしているか?(小)(幼稚園教員より、練習はしていないが兄妹がいると覚える子供もいると答えがあった。)

・雑賀崎は自然が充実している。この良さから虫を捕まえて楽しいから、捕まえた蝶を調べるなど、新しい興味にもつながって学びになっていく様子がある。(幼)

・虫が好きなので環境を工夫していたら、苦手な幼児も触って「ふあふあしている」と言葉でも伝えてくるようになった。雑賀崎幼稚園の環境を大切に生かしていきたい。(幼)

#### ○学びに向かう力・人間性と幼児の育ちについて

・年中児の大きな声での主張に淡々と答える年長児は優しく、年長の自覚が出ていた。

・言葉にはできなくても、幼児は他の子どもの様子をみて学んでいる姿がたくさんあった。そして、自然を媒体に子供たちの触れ合いや関わり合いができていた。(小)

・年中児も年長児の話に参加したくて、その子なりに話しかけて共感しようとしていた。

・幼児が先生に頼らずに自分たちで虫を探し、蝶の種類を図鑑で探していた姿は、「**自立心**」が育っていると思った。また、虫が採れずに失敗しても根気強く続けている姿もあった。

・年少児だった昨年は、友達と馴染めずに築山に上ってこけて泣いていた幼児が、年中児になって年長児にも話かける姿があり、1年の成長を感じた。年長児に憧れももっていた。(小)

・図鑑、虫取り網、虫かごなどを置いておいて、自発的に遊べる環境づくりをしていた。(幼)

・園庭では、雑草をすべて抜かずに残しておき、虫が採れるようにしたり、虫取り網を買い替え、ポケットサイズの図鑑を用意しておき、虫採りができるように工夫してきた。(幼)

#### ○研修によるその他の気づき

・小学校の先生方と一緒に話し合えるところが本園の素敵どころ。小学校とつながっていることが今回も学べた。(幼)

## 2. 3・4・5歳児 園内研究保育と協議会

10月12日(水)に幼稚園にて、園庭での活動を中心に3・4・5歳児全クラスの公開保育を行った。砂場で砂の感触を確かめたり料理をしたり、穴を掘ったり山をつくるなどの遊びや、藤棚の豆やサツマイモをつかっておままごとの遊び、築山に登る、ボールを蹴りや虫取り、ごっこ遊びなどの遊びがあった。保育を参観後、幼小教員間で協議を行った。(資料は、クラスごとの週案及び保育案)

最初に、担任より子供たちの最近の姿について説明があった。5歳児クラスの幼児は、目的をもって遊ぶようになり、試したり工夫したりして遊んでいる。ただし、新入幼児もおり、母子分離から不安を抱えているが、たくさん言葉をかけて安心できるようにしている。4歳児クラスの幼児は、友達と仲良く遊びたい思いから友達との関係に葛藤が生まれる時期なので、自分の思いを十分に出して遊べるように、友達の表情や思いを保育者が仲介したり、伝えて気付くようにしたりして援助している。年長児が年中児に言葉をかける姿もある。3歳児クラスは、1学期には大人が側にいて安心できるようにしたことややってみようと思うことが増えた。2学期には遊びを自分から探すようになり、保育室だけでなく、プレイルームや職員室にもいくようになっていく。以下は、協議の内容を示す。

#### ○知識・技能の基礎、思考力判断力の基礎について

・年中児たちのお料理ごっこで、落とし蓋をして料理をしたり、お塩をふったり、シェフのようにふるまってもてなす姿があり、イメージをもって遊んでいた。その後、異年齢でも遊ぶようになった。(小)

#### ○学びに向かう力・人間性と幼児の育ちについて

・おままごとの場面で年長児がピカチューになったつもりの年少児に餌をあげて遊んであげる優しい姿があった。小学校でも縦割り活動「つみき」で1年生には優しくなりお姉さんになる姿があり、異年齢の関わりは大切にしていきたい。(小)

・昨年度は、お店屋さんごっこでも値段をいわなかった幼児が「3000円です!」といい、ソフトクリームを工夫して持ってきてくれるなど、成長がみられたのがよく分かった。(小)

#### ○研修によるその他の気づき

・幼児が転げまわる芝生、幼児が片付けがしやすいワゴン、用具の数や量など、環境が工夫されていて素敵だった。スプーンを探しにいき、みつけたスプーンを貸し合いながら遊ぶ姿が生まれて、環境の意味に改めて気付いた。(小)

・幼稚園の先生方も子供との距離を考えて接し、一人一人に丁寧に対応できているのが雑賀

崎の良さだと思った。(小)

・幼稚園はたっぷりの時間で遊べるが、小学校では休憩時間は短く、給食を食べるのも時間がかかって大変な児童もいる。15分のモジュールで1年生の授業を考えているが、1年生は変化が大きくてしんどいだろうと思った。就学前の幼稚園で取り組んでいることは？(小)

・幼稚園でも複式クラスだと年長児が年中児に合わせてしまって育ちにくいと感じたので、給食を年齢で分けると食べるのが速くなった。一緒にいると人数が多い年中児に目が行きがちなので、年長児だけで生活や絵本を読むなどの時間をとるようにしているが複式クラスならではの難しさもある。(幼)

・小学校の複式クラスでも同じことが悩みである。人数が多いほうにひっぱられてしまう。少人数クラスだと、教師が子どもの細かいところまでみえてしまうことで、みないふりもできずに(躊躇しながら)注意をしないといけない教師側のしんどさと、まじめな子供はかくられないしんどさがあるのではないかと感じている。(小)

・子どもの数が少ないからできないこともあるが、一人一人をみて支援できることの良さもあり、課題もある。幼稚園では、次第にできるようになってきたところに「自分でする」タイミングをみて指導している。ただし、周りの友達が助けてくれるやさしさも大切にしたい。幼稚園では年中児が落ち着かないと、複式の年長児も落ち着かなくなる。ただ、宿題などはないので、なんとか対応できている。逆に、年少児を年中児と一緒にしたら、年中児の様子をみて年少児が活動を理解をしていた。子どもの主体性に任せるだけでなく、幼稚園でも工夫をして取り組んでいる。給食は、自分で食べられる量を調整して食べきれるようにし、設定する時間も年齢に応じて変えている。お箸を使うのが苦手な幼児は補助具付き箸を使っていたが、家庭の協力がなくてできないこともある。コロナ禍だと食育も黙食で取り組みづらなどの課題がある。(幼)

・小規模校で育ったことで子供の頃は、自分はしんどいと思ったことはなかった。自分たちのことを自分たちでするのは当たり前だと思っていた。大人になって参観させていただいて、子どもがみんな主役になれるよう、先生方が工夫してくださっているのが分かって、改めてありがたいと今日は感じた。(学生から)

・困っていることが小学校でも同じと気付いて、幼小のこの合同研究会はありがたい。(幼)  
・先生への信頼から気持ちを切り替える幼児の姿があった。子どもがやりたい活動を入れていくことが小学校でも重要だと思ったので、支援学級でできないことが多い児童でも、できることを少しずつ増やして達成感が持てるようにしていき、信頼感をつくっていきたい。

・トラブル場面で幼児に「どう思う？」と先生が聞き返している場面があり、子どもたちに立ち止まって考えさせることも大切だと思った。(小)

・複式学級の悩みを話し合える機会がなかったが、本校にきて話せて良かった。(小)

・昨年度1年生の校内公開授業を行った際も、(幼稚園からのつながりで)子どもたちは優しく育っているのがよく分かった。小規模校園の雑賀崎の良さを子どもたちが実感して、この幼稚園や小学校にきてよかったと思って育ってほしいと思う。(こうした取り組みをしている)雑賀崎幼稚園を保護者が選んでくれてきているのもよかった。(小)

### III. 共同研究のアンケート結果と成果

共同研究事業で、幼小合同で授業・保育の参観やビデオカンファレンスと協議を行ってきた。3年間の継続的取り組みによって、今年度には小学校教員は幼児教育への理解や、幼児たち一人一人に応じた育ちと学びをみつけ、共有して話す姿や、小学校でつながる学びを語る姿、小規模校であるこ

図2. アンケート項目平均教員成果と向上度割合

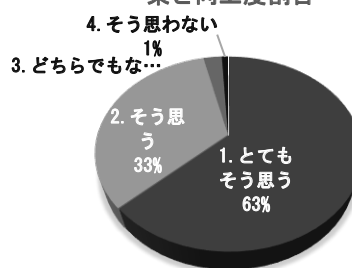
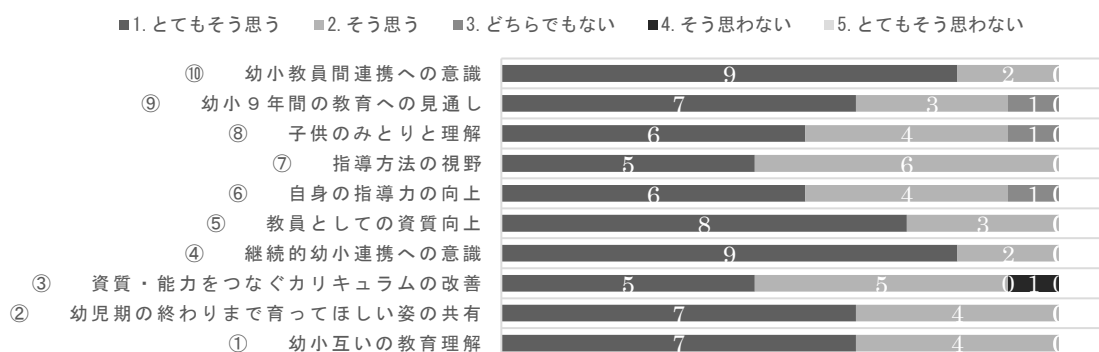


図3. 幼小合同研修参加教員による項目別成果や向上度



とで生じる困難をともに話し合うなど、深まりが見られた。また、幼稚園教員は、小学校教員の幼児教育への理解が深まるにつれて、発達に応じた援助などを詳細に説明し、小学校教員による肯定的な意見から、日頃の自身の保育の良さに気付く姿を多く見ることができていた。また、どちらの教員も、子供の名前を挙げて前年度からの育ちを話すようになっていった。小規模校・園での取り組みであったため、連携が深まり効果的であったと言える。

また、参加した小学校教員7名と幼稚園教員4名に「幼小合同研修に、参加される以前と現在で、ご自身に成果や向上があったと思う度合い」をアンケートで尋ねたところ、項目の平均で「とてもそう思う」が6割、「そう思う」が3割を占め、9割が成果や向上を実感していると回答して、項目全体で強く成果と向上を意識していることが分かった。

特に、⑩幼小間教員の意識と④継続的幼小連携への意識においては8割以上が「とてもそう思う」と回答し、全員が成果と向上と回答した。次に⑤教員としての資質向上においても7割以上が「とてもそう思う」と回答し、全員が成果と向上と回答した。他にも互いの教育理解や幼児期の終わりまで育ってほしい姿の共有など、幼小教育の見通しなども成果と向上があったと回答した。幼小接続を共有し話し合うことは、子どもたちだけではなく、教員の指導や支援などの教師としての成長にもつながると考えられた。(研究協力者：教育学部3年 泉 綾香、越智彩愛、木村真菜、久保結海、小西 瞳、小船真子、山田萌花)

<sup>1</sup> ジェームズ・J・ヘックマン『幼児教育の経済学』東洋経済新報社,2015

<sup>2</sup> 文部科学省「幼保小の架け橋プログラム」：[https://www.mext.go.jp/a\\_menu/shotou/youchien/1258019\\_00002.htm](https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/youchien/1258019_00002.htm) (2023.1.5 現在)

<sup>3</sup> 同上